

てこな・ミュージズ・ジャーナル

国王陛下の 音楽係

前回は指揮のお話をしましたが、今回はその指揮棒で栄光から一転、悲しい最後を迎えた1人の男の生涯にスポットをあてることにいたします。

ヨーロッパには大聖堂、教会、修道院、あるいは宮殿や居城がどの都市にも必ず残り、数百年も前の家並みが残っていることも少なくありません。大建造物の中、壁面を覆うタペストリーから甲冑、そしてテーブルに燭台や食器が置かれた部屋を巡ると、往時、そこに集っていた人々の豪華な振る舞いが幻のように目の前をよぎります。そのような場所の代表にあげられるヴェルサイユ宮殿で17世紀、連日繰り返された舞踏会を取り仕切ったのは1人のイタリア人でした。フィレンツェの粉屋の息子に生まれ、フランス国王付きの筆頭音楽家になり貴族の称号まで手にしたシンデレラストーリーの主人公、その名をジャン・バティスト・リュリと言います。

●奇跡を呼んだイタリア語

1632年生まれのリュリの輝く生涯はイタリア語を話せたことに始まりました。14歳のとき、イタリア語の話し相手を求めるフランス王家に職を得ることになり、仕事の合間にギター、舞踏、ヴァイオリンの腕を磨き、いつしか王家が望むような舞曲を作って注目されるようになっていったのです。

この幸運がいかに奇跡的なものであったかは、ウィーンの宮廷に雇われていた楽師は400人を数えたとか、あのバッハですら教会の外での副収入をあてにし葬儀用の作曲依頼があることを待ち受けていたとか、そしてかのモーツァルトはマンハイムの宮廷楽団に入ることを望みながら、その才能をもってしても叶わなかった、さらにハイドンはそれなりの給料はもらってはいたものの、生活上必要な小麦、油、肉、野菜などは現物支給されていたといったように、音楽史を彩る天才たちの苦労は並みだいていものではなかったのです。

ところが、リュリにはそんな苦労は微塵も見出せません。

●ルイ14世との出会い

リュリより6歳年下の1638年生まれのルイ王の最大の趣味はバレエでした。リュリが作った「夜のバレエ」で、14歳の王は太陽の役、リュリは5役を踊り、音楽のみならず、舞踊、喜劇役者とし

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

ての才能に王はすっかり魅了されてしまいました。木、金曜、土曜は舞踏会、戦いで勝利、誕生日、結婚や病気の快癒の祝宴と次々に音楽が必要だからと、リュリは国王付きの器楽作曲家に任じられたのです。

●最高位の音楽家

国王の威光を背にリュリは王立音楽アカデミーの創立者となり、歌手や演奏者決定権を掌握し、人形劇では音楽演奏を禁止するなど、音楽における権勢は目にあまるほどで、秕素で暗殺企てる同業者まで現れました。しかし国王の厚い信頼は揺らぐことなく、ついには1681年49歳のときに「貴族、フランス国王の顧問官・秘書官、ならびに国王陛下の楽団総監督」という肩書きを手し、音楽家として最高位に上り詰めたのです。

●リュリの功績

リュリが創始した序曲、プロローグそして5幕のオペラから成るフランス・バロック・オペラはとりわけ人気を博したと言われています。プロローグでは筋とは関係なく常に国王の偉業を讃え、その後のオペラは英雄や神々の物語というのが定番です。筋は明快で分かりやすく音響を豊かにするために楽器編成は工夫され、歌手たちを自ら訓練するなど、上演に向けて神経を行き届かせました。馬に乗った神を天井から降ろす機械仕掛けを舞台に仕込むといった、サプライズまで用意することもあったそうです。

●突然の死

病に倒れた49歳の王、その快癒の祝いを教会で行うことになった1687年、神に感謝し王を讃える演奏をしようとして普段以上に張りきって、150人の楽団を前に指揮棒を上げました。そのとき、リュリが手にしていたのは、杖のように長い鉄の棒。石造りの教会の床にリュリの指揮棒の音が荘厳に響きわたるはずでした。ところが、何のはずみか、力を入れて床をついた途端、自らの足に指揮棒を突き刺してしまったのです。誇り高く生き抜いたリュリですから、音楽を中断することはなかったはず。ただ傷は思いのほか深く、菌は瞬く間にリュリの足に広がってしまいました。ついには壊疽を起こし、命を救うか足を切断するかという選択を迫られました。ルイ14世を後ろ盾に生きた栄光の日々に悔いはなかったのでしょうか。2ヶ月後、足を切断することなく55歳の生涯を閉じました。その死に涙したのは国王だけで、演奏の自由を取り戻した音楽家たちは口々に喜びの声をあげたとか。。。